

全国高校総体 (インターハイ) 鈴鹿山系で開催

平成 30 年度全国高校総体登山大会 (インターハイ) 開会式は 8 月 3 日 (金) 菰野高校吹奏楽部の演奏で幕を開けた。選手団紹介、優勝旗返還、レプリカ授与、を経て、歓迎の言葉、選手宣誓と進んだ。



菰野高校で選手全員による知識審査 (自然観察、気象、救急、天気図作成) を実施した後、バスによる計画輸送で、3 日間の幕営地である三重県民の森へ向かった。

3 日の午後 6 時に、猛暑が予想される為コース変更提案があり、荒天対策ルートの基本とする変更が決定された。

8 月 4 日 (土) はコース短縮により、八風峠から谷道の下山となった。急なコース変更による混乱が予想されたが選手、関係者の臨機応変の対応により登山行動は順調にスタートした。休憩予定地点の「お菊池」の手前で、相次いで女子 2 チームがともに熱中症の症状で動けなくなった。一方は時間をおいても脈拍が下がらず、一方は点滴を必要とした。結局、行動離脱ということになり、それぞれ支援をつけて下山させることになった。



八風峠からの下山は予定のコースから外れる。落石が予想される箇所、迷いこみそうな分岐があったが、役員や補助員を配置して、問題無く行動を終えることができた。

県民の森に到着後、菰野町ボランティアの方々により、「マコモ入りそうめん」をだしていただき選手たちは感動した。幕営地は、日中の暑さで夜間も気温が下がらないという環境であり、救護所を訪ねる選手が多かった。

8 月 5 日 (日) の行動はブナ清水往復となった。大幅なコース短縮と高低差も比較的少ないコースなので、体調不良を訴えるチームは出なかった。ブナ清水は冷たい清水がわき出す絶好の休憩地であり、長めの休憩をとった。選手の表情も和らぎ笑顔がみられた。ゴールの朝明茶屋に戻ってから、地元ボランティアの方々による「おもてなし」で、草餅、アイス、お茶が選手や補助員にふるまわれ、再び顔がほころんだ。

8 月 6 日 (月) は、猛暑対策で、大幅なコース変更措置をとった。ロープウェイ駅から中道を登り、御在所朝陽台広場に上がり、男子隊は国見岳を往復した。その後、朝陽台で監督隊と合流して、御在所頂上部の散策という計画であった。ただ、男子隊、女子隊ともに各隊長はかなりの体調不良者が出ることも覚悟しての行動であったし、県防災ヘリへの出動要請も覚悟していた。

この日は相変わらずの高温の予報ではあった。しかし御在所山には終始さわやかな風が吹いた。この風に助けられて、1 チームも欠けることなく、全てのチームが朝陽台に到達することができた。その後は、選手は監督と合流して、思い思いの行動をとってロープウェイで下山した。

8 月 7 日 (火) は閉会式。8 時 50 分頃に雨が降り出したため、早く集合して、午前 10 時に閉会式が始まった。成績発表、表彰式と続いた。A 隊 (男子隊) 優勝は広島県修道高校、B 隊 (女子隊) 優勝は山口県防府高校であった。

三重県山岳連盟の各山岳会、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

以上 葛原義和 (高体連登山部)

第7回鈴鹿山系連絡協議会

台風24号が九州東南海に接近中、9月29日（土）～30日（日）の予定で近府県（滋賀、愛知、大阪、京都、兵庫、三重）の岳連会長、副会長、理事長、遭難対策委員長、自然保護委員長の方々が集合。三重県からは、加藤理事長、草川副理事長、小古遭対委員長、小寺遭対委員、萩の5名が、協議会の会場である東近江市奥永源寺溪流の里（道の駅2F）に集合。最初に、司会進行である滋賀岳連理事長の雲氏から、翌日荒天が予想されるため、29日のみで打ち切り提案がされた。

伊藤克己滋賀岳連会長（日本山岳スポーツライミング協会副会長）の挨拶の後、各県からの各県の山域での山岳遭難事故、自然保護活動、について報告をした。その後、各県報告を受けての協議、意見交換をおこなった。

報告では、滋賀岳連から鈴鹿山系を中心に報告がされた。平成29年度から30年度において、鈴鹿山系の山岳事故は依然多く発生している。29年度の滋賀県側における事故を、登山者の県別の人数で見ると、滋賀県の登山者3名、三重5名、京都1名、愛知6名、大阪1名であった。そのうち負傷が7名、救助が10名であった。29年度の滋賀県全体の山岳事故は、76件108人で、死亡4名、行方不明1名、重傷*名であった。平成30年（今年）も死亡事故が2件おこっている。5月御池岳での下山時の滑落、7月の綿向山（水無山）での道迷いから滑落の事故であった。（他の県からの報告は、後半の協議・意見交換の中で記述）

休憩に入り、その間、愛知岳連から「初心者のための読図講習会2018」「気象遭難対策講習会2018」「遭難を考える講演会」「安全登山サテライトセミナー」のレポート、案内をいただく。特に、読図講習会は27名、気象遭難講習会は22名の参加でおこなわれたものである。続いて、東近江市エコツーリズム推進協議会で作成した「鈴鹿10座登山ガイド」「鈴鹿10座登山パンフレット」をいただく。大部分の鈴鹿山系の登山書籍は三重県側の記述が多く、最近の道迷い事故が滋賀県側でも多発しており、関係者の方の苦勞されているのがわかる。

後半は各県の協議・意見交換がおこなわれた。低山の山岳事故防止のための対策では、軽率登山者の問題にメスを入れる必要があるのではないか（大阪）。初心者対象の登山講座、登山救急講座を実施する必要あり（愛知、滋賀など）、テープが有るので迷った事例が多く、

林業用テープと登山路を示すテープを区別できるようにすれば良いのでは意見がでた。林業関係者は伐採から残す幹にピンクテープを巻くとの事。また京都トレイルでは登山路の「赤テープ」は「ない」との事である。

道標に関しては、各県でその仕様がバラバラで、県内でも山域により違う現実もある（滋賀）。国有林では危険看板の設置が反対される現実あり（兵庫、六甲）。

駐車場問題では、鈴鹿山系の三重県側は駐車場が多い方であるが、京阪神から藤内壁に向かうために早朝出発すると御在所岳に到着するのは午前9時となり、駐車場が全くないので困る（兵庫など）との事。パークアンドライド方式は新穂高温泉、大台ヶ原でも検討されたが採算がとれないので実施されなかった（奈良）。なお蒼滝公共駐車場（無料）が利用可能になった（三重）。

自然災害による登山道被害（倒木、土砂崩れ）把握各県では、把握をどのようにしているのだろうか。岳連などがどうかかわっているのか、の意見があった。

最後に、来年度の開催については、三重県で、従来通り、2日間（1泊2日）で実施とすることになる。

以上 萩 真生（三重カモシカ登山クラブ）

福井国体視察

今年7月、2021年に第76回国民体育大会（三重とこわか国体）の開催が決定。山岳（第74回大会から「スポーツライミング」に名称変更）の開催地は菟野町となった。国体の山岳は、「リード競技」と「ボルダリング競技」の種目があり、選手2人と監督1名構成され、「成年男子」、「成年女子」、「少年男子」、「少年女子」の種別がある。参加人員は、成年男子は47チーム141名、少年男子はブロック予選で勝ち上がった20チーム60名、成年女子と少年女子もブロック予選で勝ち上がった18チーム各54名、総勢309名である。

リード競技は、高さ12m以上×幅3m以上で傾斜のある人工壁で到達高度を競う。制限時間6分以内に1度も落下することなく終了点のカラビナにロープをかければ「完登」となる。到達高度順に個人順位をつけ、チーム合計で順位が決定される。ボルダリング競技は、高さ5m×幅6mの壁2基・4面で構成された人工壁の課題をクリアしながらゴールまでの到達を競う。終了点のホールドを両手で保持することができれば「完登」となり、

一度も落下せず完登することを「一撃」という。制限時間内であれば何度でも挑むことができるが回数が多いほど評価は下がり、4つの課題の完登数とゾーンと呼ぶポイントのチーム合計で順位が決定される。

総合成績は、男女総合成績（天皇杯得点）及び女子総合成績（皇后杯得点）として競技得点と参加得点の合計で得点の多い順に第1位から第8位までが決定される。なお、参加得点は大会に参加した都道府県に10点が与えられるので、成年男子以外の3種目でもブロック大会で勝ち上がって本大会に参加した都道府県が有利である。今年の福井国体に三重県から参加したチームは、成年男子と成年女子の2チームであり、成年女子は、リード決勝2位、ボルダリング決勝4位、女子総合成績・皇后杯5位、男女総合成績・天皇杯9位と好成績であった。しかしながら、少年男子、少年女子は参加できておらず、少年少女の選手育成が今後の課題であると思う。

大会役員は、本部役員、競技役員、総務委員、審判、ルートセッター・ビレイヤー、通信・連絡員、計測記録員、医務員、総務部、競技部、輸送・宿泊部の130名が文書に規定されているが、今年の福井国体においては、福井県山岳連盟関係者190名が動員され、補助員、ボランティアを含めた総数は約300名とのことであった。4年前から準備を進め、池田町と福井岳連とで月1回の打合せを実施し、1年前からは日本山岳クライミング協会本部へ出向き進捗報告・フォローがあったという。県・町・岳連の連携が重要で、特に事務局長と会計業務が重責であると同った。

今回、2018年10月4日～7日の福井国体開催期間中に三重県山岳連盟傘下の各山岳会代表者を含めた約20名が参加して会場、競技視察と合わせて関係者以外立入禁止箇所も見学できた。福井県山岳連盟の会長、副会長から後催県への情報とアドバイスをお聞きする機会を得て、3年後の三重とこわか国体開催に向けた動機づけと課題の確認ができた。また、2019年開催茨城県、2020年開催鹿児島県の関係者様ともご挨拶することができた。最後に、福井県山岳連盟副会長の山本利幸様には大変お世話頂き、感謝申し上げます。



以上 岡田浩嗣（東芝山岳会）

三重とこわか国体 PR 活動

7月18日の（公財）日本スポーツ協会理事会にて、第76回国民体育大会の開催地を三重県とすることが決定され、『スポーツクライミング』競技のリード種目及びボルダリング種目の全種目が菰野町で開催されることになりました。日本山岳・スポーツクライミング協会が管轄する競技で、三重県山岳連盟は、開催地である菰野町と共に大会運営をすることになります。

10月14日の「こもガク×大日本市菰野博覧会」、10月21日の「第13回鈴鹿山麓かもしかハーフマラソン」の会場において国体開催のPR活動として『クライミング体験会』を行ないました。各会場内に、前日より岳連会員が集まって、約5Mの高さのボードを設置し、ロープで安全を保ちながら壁に設置された手がかり、足がかりとなるホールドのルートを作りました。当日は、岳連会員が体験者一人一人にハーネス（ロープを体に結びつけるための安全ベルト）を装着し、ロープでビレイ（安全確保）を行ないました。各会場共に400名を越える小中学生やその保護者の体験者が集まり大盛況でした。町民の皆さんへ国体のPR活動をすることができました。来年、再来年も引き続き菰野町の各イベント会場で開催していきますので会員の皆さんの協力をお願いします。



以上 三重県山岳連盟理事長 加藤正之

次号の内容（予定）

- ・スポーツフェスティバル山岳 2018
- ・山岳遭難防止講演会
- ・少年少女登山教室 2018
- ・（今年の県内の山岳遭難事故）
- ・2019 年度行事計画
- ・三重国体に向けて
- ・山登りベーシック塾 2019

あとがき

本年は岳連の活動報告を前期と後期に分けてしていきたいと思います。今後は、内容面では春夏秋冬の年4回発行または隔月発行が理想です。今号からHPにはあげますが、会員の皆様全員に届く方法を模索中です。（M. H）